

教師教育における「礼儀を用いた予防的生徒指導」の授業開発（1）

柴崎 直人^{*1}

本開発においては教職大学院での教師教育における生徒指導に関する講義に際して、その中の「予防的指導」に注目し、受講生に対して「礼儀」をその指導の手掛かりとして用いることにより、生徒指導に関する知識、理解、指導力等の深化を目指す教師教育の授業の開発を試みた。その結果、受講生は本講義のねらいを果たすだけでなく、大学院側が求める成果を、学生がその学びの中から自ら会得し、それに伴う意識と態度の変容がみられた。

〈キーワード〉生徒指導、礼儀、予防的指導、教師教育

はじめに

生徒指導は、児童生徒の自発的かつ主体的な成長・発達の過程を援助するものであることが『生徒指導提要』に示されている（文部科学省『生徒指導提要』教育図書、2010,p.13）。それを達成するための指導原理として集団指導と個別指導が挙げられるが、その双方において

その目的を①「成長を促す指導」、②「予防的指導」、③「課題解決的指導」の三つに分けることができる（文部科学省 2010,p.14）。

本研究はその中の「予防的指導」に注目し、「礼儀」を指導の手掛かりとして用いることにより、生徒指導に関する知識、理解、指導力等の深化を目指す教師教育の授業の開発を試みるものである。

1. 予防的指導と礼儀

生徒指導の意義は、教育課程の内外において一人一人の児童生徒の健全な成長を促し、児童生徒自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための「自己指導能力の育成を目指す」ことにある（文部科学省 2010,p.1）。その内容の一つである予防的指導についてはさまざまなアプローチがあるが、ここでは礼儀をその手掛かりとして用いるアプローチを試みる。

生徒指導における礼儀に関する予防的指導としては、たとえば福岡市教育センターが校内研修リーフレット「学級経営を充実させるために」において示すように、「学期の節目や行事前に行うルールやマナーの確認指導」（福岡市教育センター 2011,p.4）という位置づけで行われてきた。この位置づけにおける「礼儀」は、生徒指導提要において問題解決の力を獲得する集団や社会との関りとしての「人間関係を築こうとする態度」（文部科学省 2010,p.14）として扱われるというよりも、「基本的な生活習慣の確立」を目的として扱おうとするものであった。たとえば国立教育政策研究所発行のリーフレット「生徒指導って、何？」においては、「例えば、こんなことも生徒指導」として、次のような解説がなされている。

「様々な学校場面で何げなく行われている働きかけの多くは、児童生徒の成長・発達を促したり支えたりする生徒指導の働きかけのはずです。以下に、幾つかの例を示します。

登校時や授業の場面では

- ・登校時の朝のあいさつにはじまり、始業時のあいさつ、終業時のあいさつなどを促す。
- ・始業開始とともに着席すること、
- ・正しい姿勢で机に向かって学習すること、
- ・教師やほかの児童生徒の話に積極的に耳を傾けること

^{*1} 岐阜大学大学院教育学研究科

Developing Lessons for "Preventive Student Guidance Using Courtesy" in Teacher Education(1)

・自らも積極的に考えたり発言したりすること

…などを指導する」(国立教育政策研究所 2012)

このように、あいさつを基本的生活習慣の糸口として活用していることが伺える。

しかしこれは礼儀の本来の機能である、他者との敬意のやりとりという機能が効果的に用いられているとはいえない。

そこで本開発においては、「礼儀」を「基本的生活習慣の確立」の手段として用いるというよりも、集団や社会との関りのなかで「敬意を以て人間関係を築こうとする意識と態度」の一種として捉えて指導することで、礼儀による他者や集団との敬意を介した関りによって、児童生徒が他者や集団、組織からの受容が果たされるという視点による「予防的指導」の手掛かりとして考える立場をとる。このような新しいアプローチを試みることで、受講生における生徒指導への理解の深化と指導力の向上を企図するものである。

2. 方法

(1)対象

令和 2 (2020) 年度の岐阜大学教育学研究科教職実践開発専攻(以下「教職大学院」)対象科目「生徒指導と教育相談の理論と実践」の受講者。水曜日夜間講義 5 名(1 年生 4 名, 2 年生 1 名, いずれも夜間現職院生)。

(2)実施時期および実施概要

令和 2 年 12 月 2 日から令和 3 年 1 月 27 日にかけて 15 回にかけて行われた令和 2 年度後期開講科目「生徒指導と教育相談の理論と実践」の授業内において、筆者による生徒指導に関する講義を行った。前半 8 回が筆者による「生徒指導」を主とした講義であり、後半 7 回が別の指導者による「教育相談」を主とする講義であった。なお新型コロナウイルス禍に伴う非同期遠隔授業であったため、パワーポイントファイルに音声を入れたものを大学のサーバにアップロードしておき、それを受講生が適宜視聴して課題を行う、という形式をとった。講義においてはパワーポイントによる学習 1 単位時間と、それに伴う課題の遂行と、ネット上でのディスカッションによる 1 単位時間をセットにした展開を計画したところ、4 回分の

セットとなった。その内訳は次のようなものである。

- ① 12/2 6 限 オリエンテーション 生徒指導と礼儀
7 限 講義 生徒指導とは何か
- ② 12/9 6 限 講義 礼儀とは何か
7 限 ディスカッション
教えてみたい礼儀・マナー
- ③ 12/16 6 限 礼儀・マナー指導の実際①
7 限 ディスカッション
礼儀・マナー指導の理想と現実
- ④ 12/23 6 限 礼儀・マナー指導の実際②
7 限 ディスカッション
礼儀・マナー指導の理想と現実
総括

(3)学習内容の詳細

受講生には予め教科書(柴崎直人『礼儀・マナー教育概論』,培風館,2013)を入手しておくよう指示した。

初回目である 12 月 2 日は生徒指導と礼儀の関連について、特に生徒指導の目指すところと礼儀の構造との関連を中心に講義を行った。その後は大学オンライン上の学習システム(以下「AIMS」)を用いて、次の 3 つのテーマでディスカッションを行った。

- ①あなたが社会生活や日常生活で必要と考える礼儀・マナー
- ②(もし教えられるなら)あなたが教育現場で教えてみたい礼儀・マナー※教育現場で教えたことのある礼儀・マナーとエピソードでも可
- ③なぜそんなものがあるのか不思議に思う謎マナー

これらについては講義時間内で受講生同士でのディスカッションを行い、授業者である筆者も適宜コメントを加えた。授業終了時間後は、2 日の猶予をもって書き込みの締切を設定した。第 1 回目の締切日は 12 月 4 日となった。

2 度目の講義日である 12 月 9 日は、「礼儀とは何か」をテーマとした講義を、食事作法の解析を中心として行った。また、前回のディスカッション内容を手掛かりとして講義内容の深化を試みた。その際には生徒指導と礼儀との関連について、事例の一つ一つが生徒指導と関連しているという道筋を明らかにすることを意識して指導及び助言を行った。

後半は前回と同様にディスカッションを実施し、あわせて「講義・資料を踏まえて新たに知りたい礼儀・マナー」について意見交換を行った。

なお、この回において受講生からは次のような感想が寄せられている。

・高校では道徳的な要素を、各教科のどの単元で実施しているのか年度初めに提出しますが、「道徳」に関して我々は非常に疎いように感じました。敬意が行動となって表現されることがマナーであるという部分は非常に印象的でした。(受講生 A)

・B 先生もご指摘されていましたが、「恕」の言葉に込められた「己の欲せざるところ、人に施すことなかれ」について、生徒指導の場面でよく用います。相手の立場に立つ。自分さえよければいいのではなく、相手意識をもって接す

ることは礼儀にも生徒指導にも共通して言えることだと思います。学校生活は共生社会を目指しているのです、生徒指導の面においても礼儀が密接に関わってくるのだと思いました。(受講生 C)

このように、礼儀の本質と構造に触れ、それが生徒指導とリンクすることに気付いたことによる鮮烈な感動が伝わってくる。

3 度目の講義日である 12 月 6 日は、受講生の興味関心に沿ったテーマで礼儀と生徒指導との関連について検討し、理解を深めさせた。具体的には受講生からディスカッション内で挙げられた疑問や質問について、その礼儀と生徒指導との関連について解析していき、そのうえで実際に児童生徒に指導する際の基本とポイントに言及するという手法を用いた。主な話題は次の通りである。

＜教師は世間知らず？＞

＜挨拶＞

＜入室＞

＜面接試験でのマナー＞

＜上座・下座＞

＜手紙・メール＞

後半は前回と同様にディスカッションを実施し、あわせて「講義・資料を踏まえて新たに知りたい礼儀・マナー」について意見交換を行った。

この回に関する感想の中には次のようなものがみられた。

・敬意が行動となって表現されることがマナーであるという部分は非常に印象的でした。(受講生 A)

・自分さえよければいいのではなく、相手意識をもって接することは礼儀にも生徒指導にも共通して言えることだと思います。学校生活は共生社会を目指しているので、生徒指導の面においても礼儀が密接に関わってくるのだと思いました。(受講生 B)

・知りたいことは、各マナーや礼儀の理由です。つまりなぜそのようなマナーや礼儀になったのかということです(受講生 C)

礼儀の構造の理解への感動、そして生徒指導と礼儀の関係性への気づきに対する素直な喜びが伝わってくる感想である。

4 度目の講義日である 12 月 23 日は、前回は基本編とするならば応用編としての位置づけで、受講生から挙げられた疑問や質問に関する礼儀・マナーと生徒指導との関連について解析していった。そしてまた実際に児童生徒に指導する際の基本とポイントについて指導を加えた。主な話題は次の通りである。

＜服装・みだしなみ＞

＜ビジネスマナー＞

＜通信のマナー＞

＜飲食のマナー＞

＜日本独特のマナー＞

この回では社会人としてのマナーが中心であったためか、ディスカッションもかなり活発に行われていた。特に名刺の作法や飲食の作法に関心が高く見られた。

3. 結果

「礼儀を用いた予防的生徒指導」を基盤とする教師教育における生徒指導の講義の効果を検討するために、受講生の学びの成果について、講義修了後に筆者に寄せられた感想を、個人情報等の遵守などを勘案して提示したうえで、その抽出を試みる。

(1) 受講生 A の感想

「『心』から行う『礼儀・マナー』が、生徒指導を変える」

「自分が学校教育において指導してみたいと考える『礼儀・マナー』はたくさんあります。今までにも様々な礼儀について、児童生徒に話しました。挨拶について、職

員室入退室について、人との話し方について…。(面接練習で) 目を見て話すことや姿勢について…。「日常」も「人生の岐路に立つような特別な時」も、「礼儀・マナー」を意識して行動していくことはとても大切なので、児童生徒に知ってほしいことがたくさんあります。

1つ取り上げるのなら、「心を込めてすべての行動を行う」ということです。「心が態度に出る」と言います。表面的に手順だけ覚えて上手に行動してみても、そこに「心」がないと、その行動に深みがないことを見透かされます。私たち教師も同様で、児童生徒に「礼儀・マナー」を教えるようにする際、そこに「心」がなく、決められたことだけを決められた通りに教えるようにするだけであると、児童生徒に見透かされます。「先生は、本当に私たち(児童生徒自身)のことを考えてこのことを教えてくれているのだろうか」と思われます。私たちも、教師として以上に、一人の人間として、児童生徒の前に出て、「その礼儀を教える意味」の説明も含めて、「心」を込めて教える必要はないと思います。

心を込めてすべてのことを行えば、「心」の存在をより知ることとなり、相手の立場に立って考える「心」や、相手のよさを認める「心」、自分を省察する「心」、先を見通す「心」等の理解につながっていくように感じます。それが生徒指導にも寄与すると考えます。相手の立場に立って考えることができるようになると、いじめに対する正しい考え方ができ、いじめが減ると思います。先を見通すことができると、問題行動が減ると思います。自分を省察することができる、学級の中にプラスの雰囲気が増えると思います。もちろんすべてがうまくいくとは思いませんが、そのきっかけにはなるのではないかと考えます。

私事です、昨年度までの3年間、名刺を渡したり頂いたりする機会が多かったです。名刺交換の際、どのような姿勢がマナーとしてベストなのか、最初は試行錯誤しながら行っていました。また、自分が会議を開催する機会も多く、出席していただく方の席札の配置等、迷いながら行ってきました。勉強しても、本当にこれでよいのか心配になりました。また、同じ種類の礼儀・マナーでも、時代の流れやその時の状況によって変わってくるものもあり、今この状況でどれが当てはまるのか分からなくなることもありました。当時私は、「今までのことについて調べる」

「本やインターネットで調べる」「そのことについてよく知っている方に尋ねる」の3点を中心に勉強しました。そして、この時に、「どんなことも『心』を込めて行えば伝わるものがある」ということも学びました。

私たちは、「今すぐに身に付けるべき礼儀・マナーに特化した研修に、タイミングよく参加できる機会」はまずありません。よって、「自ら学ぶことが重要である」と感じました。児童生徒の中で、今、「礼儀・マナーは自ら学ぶことが重要である」と感じている割合は、どのくらいかなと思います。年齢も若く経験も少ないので、「自ら学ぼうとする意欲は人それぞれである」し、「いざ学ぼうと思っても、どのように学べばよいのか、その術(環境や方法等)を持ち合わせていない」ように感じます。よって、私たち教師が、指導していかなくてはいけない部分があると思います。自分が学校教育において指導したい「礼儀・マナー」について、直接教えることも重要ですし、それを受け入れることができる児童生徒に育てていくことも同様に大切であると感じます。今回のご講義は、自分が今まで思ったことがなかった、意識したことがなかった視点からのご講義で、新しい知見が広がり、大変勉強になりました。生徒指導を行う上での「教師として」「人として」の自分のあり方についても深く考えることができました。ありがとうございました。」

(2)受講生Bの感想

「望ましい言葉遣いと生徒指導との関連性」

「私が学校教育において指導してみたいと考える「礼儀・マナー」は「言葉遣い」である。社会で生活するにあたり、社会人として正しい言葉遣いができることは、相手を不愉快にさせないことや信頼関係を築く上でも大切なことである。私の勤務する学校では、挨拶ができない、目を合わせない、他の児童や先生と話している中、平気で「ねえねえ、これさあ…」といって割り込んでくる児童がいる。保護者の中には、私より年下の親がタメぐちで話しかけてくる。保護者の言葉遣いが乱れているのに、子どもたちが将来の社会生活に向けて、望ましい言葉遣いを身に付けていけるとは到底思えない。学校現場において、言葉遣いを指導することは、望ましい言葉遣いを身に付けることにつながる。そのため、私は学校教育において、「言葉遣い」を指導していきたい。

言葉遣いについて、指導できる場面はたくさんある。あいさつ、職員室での入室、学校での内線電話、授業中や休み時間の会話などの場面である。学校は社会の縮図である。学校で大事にしていることは、将来社会でも求められることである。言葉遣いについての場面をとらえ、指導を行うことは、人格の完成を目指すことにもつながる。

人とすれ違う場面での挨拶や授業開始の挨拶では、相手の目を見て、相手に聞こえる声で挨拶をすることが大切である。本校の児童を見ていると、無言だったり、あえて目を合わせなかったりする児童が多い。理由を聞くと、「自分は挨拶した」と返ってくる。自分は小さな声で挨拶をしたつもりでも、挨拶された相手がどう受け止めるかで挨拶の印象は変わる。相手意識をもって、挨拶が出来ているのかが大事になる。ここでも、接した相手を不愉快にさせない（されて欲しいことをする）という、礼儀の極意につながり、生徒指導と礼儀が密接に関わる。

また、入室時のマナーも指導が必要である。校舎内でも職員室は特別な場所である。児童は大人（教師）の仕事場という意識をもち、入室の目的や名乗りをしないとけない。内線電話も同じように、名前を名乗って応対し、相手の要件を聞く。このような限られた場で、その人の人柄や礼儀が身に付いているかなど、相手に判断されてしまう。だからこそ、その場面で適切な応対ができるよう、指導が必要である。

授業中や休み時間など、時と場を見て言葉遣いを選ぶことができる力も必要である。それには、教師が児童のお手本となれるような姿勢が必要である。教師のモデルを見て、子どもたちも言葉遣いについて学ぶからである。

生徒指導の目的は「一人一人の児童生徒の生きる力を伸ばす」ことである。これは教育の原点であり、集団指導と個別指導の両方が必要となる。そのため、教師は児童の発達段階に応じて、段階的に社会的存在としての人間の「私」性の側面ならず、「公」性をも併せもっていることを意識させることが重要である。正しい言葉遣いは、相手を尊重することから、人権の尊重にもつながる。また、お互いに望ましい言葉遣いをしていると、周りの雰囲気もよくなる。それは学級集団としての成長にもつながる。これから社会人として歩みだす児童に、相手を不愉快にさせない言葉遣いを教えることは、生徒指導の面とも大きく関わり、本校の学校目標である、「自ら仲間とともに

たくましく生きる子」の育成につながっていくと考える。」

(3)受講生Cの感想

「制服の着方と生徒指導」

「岐阜県の公立高等学校では、現在制服を採用している。生徒たちはその制服を流行に合わせて着崩している。女子生徒もスカートを規定の長さよりも短くして着用し、ハイソックスが規定であるにも関わらず、くるぶしソックスを履く。また、カッターシャツの裾をズボンやスカートに入れなくても良いデザインの学校では、カッターシャツの裾をズボンやスカートに入れる指導は行わない。

このような状況において各担任は個々に生徒へ声をかけ、身だしなみ指導を行っている。

生徒指導部が指導するまで私たちは生徒の服装指導を待っていてよいのか。そもそも我々教職員の心の根本に「憎まれ役は誰がやるのか」という気持ちがあるのではないか。

本当に服装指導は憎まれ役なのか。私は、今回の講義を拝見しこのように感じた。

着崩すことは流行でありカッコいい。これは着崩す生徒たちの思いである。全体の中に入らなければならないという思いがある。一方で制服を正しく着ることは「正装」であり、そこには流行もない。ただ一つ、正しい着方があるだけだ。私はこの「正しい着方」を生徒たちに気づかせたい。私自身も「今日は大事な会議がある」「今日は保護者懇談会がある」といった日には、必ずジャケットを着用する。それは参考文献にあったようにその人の意気込みや仕事に向き合う姿勢が伝わるからであると思っているからだ。きちんとこちら側の思いを伝えたいと思う時、私はジャケットを着用して自分の気持ちも引き締める。「人は見た目で判断するな」と言われる。しかし、「見た目に表れるその人の誠意はある」と感じている。私たちは生徒にとって家族の次に最も身近な大人である。彼らは私たちの姿勢を見て、育っていく。私は自分自身の姿でもTPOに合わせた服装を心掛ける「大人の姿勢」を生徒たちに伝えていきたい。

『衣替え』が存在しない学校では、季節を感じて生徒が自ら服装を変更していくことができるように、その力を育てるためだとする。その為、季節の制服の規定を正式に定めることが困難である。このような状況であることを

踏まえ、『式典装』の存在が見られる学校がある。「○○式」という行事の際だけ、制服の着こなしが明確に定められている。その中で「ジャケットを着用する」という部分がある。生徒はジャケットを着用して体育館に集合する。しかし、教員がウィンドブレーカーを着用して体育館で整列指導を行う。私はこれは違うと思っている。寒いのは生徒も同じだ。生徒と教員は立場が違うという意見もある。しかし、根本にこの「式」は重要な式であるという気持ちを共有していれば、我々教職員もジャケットを着用してこの式に誠意をもって参加するという気持ちが大事なのではないかと、そうした気持ちでこの式に向かうことで生徒達もこの式を重要な式典であると認識するのではないかと考える。

制服の着こなし方に関して指導することは本当に生徒達からの憎まれ役か。答えは否である。私はこの制服の着こなし方に関して、正しい着こなし方を指導することを通して、生徒達に相手に「誠意」を伝えることの重要性を伝えていきたい。そうすることが彼らが社会人になったら必要とされる力であることを伝えていきたいと感じた。」

(4) 受講生 D の感想

「食事の作法から子どもの自己実現を図るための援助を」

「『生徒指導提要』に『生徒指導とは、一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めるように指導、援助するものであり、学校がその教育目標を達成するための重要な機能の一つである。しかし、これまで、ともすれば学校における生徒指導が問題行動等への対応にとどまる場合があり、また、教育相談との乖離という問題も指摘されてきた。』と示されている。

これまで勤務してきた学校を振り返ってみると、職員集団が、危機意識が低かったり、児童・生徒理解に甘さがあったり、協力体制になかったりすると、生徒指導事例が発生すると、事後対応に終わればなしだったような気がする（小学校に多い）。逆に、危機意識が高く、児童・生徒理解の感覚が研ぎ澄まされ、学校全体で指導していく体制が整っているときは、未然に防いだり事件が小さくすぐに収束したりした記憶がある（中学校に多い）。

このような経験も踏まえ、私自身を振り返ってみると、

生徒指導における未然防止については意識高く実践してきたつもりである。だが、生徒指導における予防的な指導は、正直、意識して指導してこなかった。本講義で予防的な指導として「ルール・マナー・礼儀指導」があることを学んだ。よって、私自身がこれらを実践するのはもちろんだが、学校全体で進める生徒指導が必要なので、勤務先の生徒指導担当に伝え、終礼・職員会等で全職員共通理解のもと、子どもたちに指導していきたい。

私自身、3学期から目の前の子どもたちに対して特に力を入れて指導していきたいと考えているのは「食事の作法」である。あいさつや言葉遣い、入室のマナーなどについては、これまで比較的重きを置いて指導してきたのであるが、食育や食事の作法についてはあまり力を入れてこなかった。したがって、これを機会に指導していきたいと考えている。

食事の作法のねらいや意義は、「日常の食事の中にもさまざまな対象を大切にすることが存在することを知り、それを実行する態度を育てる」である。これは、「人間は『他を大切にすることが心の適切な表現』を試みることで、自分を含めた関係者のすべてが等しく気持ちよく過ごすことができる」ということである。

食事の中での他を大切にすることがとは

- ①自分と食事をともにする人々に対して、不快感をいだかせずにおいしく楽しく時間を過ごしてもらうための配慮
- ②自分に食事を供給してくれた人々（調理者・食材配達者・食材運搬者・食材加工者・食材生産者）への感謝
- ③食材を育んだ天地の恵みへの感謝

の3つがある。子どもの実態から考えると、①では、「足を組んで食べない」「三角食べをする」「食べられないものは皿の奥にまとめる」を重点にして指導していきたい。②③については、私の学級では食事前後のあいさつで給食係に「おいしい給食をいただきます。」「おいしい給食ごちそうさまでした。」と言うようにしている。その後にみんなで声を合わせて「いただきます!」「ごちそうさまでした!」と言っている。その際、全員が心（感謝）を込めて言っているかは分からないので、声が小さかったら、なぜそれがいけないかの理由を話し、やり直しをするようにしたい。また、学級の中で、食べ終わったらすぐに手を合わせ、おじぎをしてから食器を返却しに行く子がいい

る。この子はまさに②③を自ら実践できている子である。私は今までそれを見てきたが、特に学級のみんなに伝えたことはなかった。本講義で学習してから、そのことは全体に広げるべき事実だと感じた。だから、なぜその子はそのことを毎日続けているのかを、みんなの前で話をさせ、クラス全体でその価値を認め、学級全体で実践していくとよいことを指導したい。

今回食事に絞って指導していくが、この毎日の指導が、子どもに自己実現を図っていくための自己教育力や実践的な態度を育むことにつながることを期待したい。」

(5)受講生 E の感想

「本校の生徒は素直で明るく落ち着いて生活できる生徒が多い。一見問題などなさそうだが、生徒同士のちょっとしたトラブルが多く、放っておくと後に学校生活に大きく影響し、仲間を巻き込んで大きなトラブルとなる。不登校にもつながる。本当なら大人同士で解決する友達同士のすれ違いや恋愛トラブルを自分たちで解決できない生徒が多い。自分の気持ちを素直に表現できず、相手にどんな言葉をかけていいのかもわからず、仲直りのタイミングもつかめない、そして協力してくれる第三者を作れない。コミュニケーションの取り方がわからない生徒が多い。大人が入ってタイミングを作ったり、どのような言葉をかけていいのか教えたりしている。2020年までは土の時代と言われてきた。ヒト・モノ・カネが世の中の中心となって動く時代。権利や学歴、経済がこの世を動かしてきた。2021年は何百年に一度の変換期風の時代と言われています。物事の本質や摂理、精神的自由、経験など無形なものに価値が高まる時代のはじまり。つまり昨年度までとは真逆の価値観。精神的自由を自分を大切にした生き方と捉えるなら、人とかかわって生きる人間は相手を理解するというところにさらに磨きをかけなければいけない。つまり相手の心や思い、本質を見抜かなければいけない。アニメ、鬼滅の刃が代表的な例である。主人公がかっこいいだけで魅了されているのではない。そこで私はこの時代を生きる本校のコミュニケーションに悩む生徒に、手紙の書き方を教える生徒指導を提案したい。直接会って思いを伝えることが一番大切だが、情報連絡手段で最も格式高く、訪問の作法を紙を用いて実践しているので、書いた手紙を渡さなければ何度も繰り返しコ

ミュニケーション法が練習できる。手紙には相手を思う「怨」がいたる所に表現されており、謙虚さまでも表現できる。今年年賀状が復活の兆しをみせたのもこの理由があつてのことではないか。車のセールスをしている知り合いの方も新車の納車の日にはお客様に直筆の手紙を贈るのだそう。10年前は自分の学級の生徒が合唱コンクールの朝学級の生徒全員に手紙を書いて机に置き、40人の心を13歳の少女がまとめていた。そこにはどんな言葉が並べられていたのか。SNSでトラブルを抱える生徒も多い中、ちょっとした言葉の捉え違いや絵文字の捉え違いが大きな問題に発展しているのなら、相手に伝える言葉の効果や相手に伝える言葉の選択の仕方、自分の立場と相手の立場の理解、を教える機会が必要な世の中になってきているのではないだろうか。自分を主張したいのなら謙虚な自分にならないと相手に受け止めてもらえないことはSNSでは学習しにくい。現在手紙を書く機会は3年間の中学校生活でほとんどない。職場体験のお礼状や校外活動でお世話になった地域の方など年上の方に書く機会ならある。同じ年齢の仲間に自分の気持ちや考えをしたためることはほとんどない。普段乱暴な字を書く生徒も手紙になると、ある程度整った字で丁寧に書く生徒が多い。そこから本気の気持ちが伝わる。

現在生徒会担当として、仲間のすてきなところを書いた手紙を相手に渡すという活動を定期的に行っている。しかし、何を書いたらいいかわからない、どのような言葉を使ったら相手のよさが伝わるのかかわからないといった生徒も多い。しかし、もらった手紙を大切に保管してあるという生徒も多い。私は今その機会を大切に指導していきたいと考えている。」

(6)受講生の学びと気づきの抽出

受講生 A は、児童生徒に「礼儀・マナー」を教えようとしたときそこに「心」がないと児童生徒に見透かされ、信頼を失うと述べ、教師として以上に、一人の人間として、児童生徒の前に出て、作法の説明と共に「礼儀を教える意味」の説明を加え、そこに「心」を込めて教えなくてはいけない、との学びを述べている。

B は学校において「言葉遣い」の指導を重視していきたいこと、そして言葉遣いについての指導は、児童生徒の人格の完成を目指す営みとつながっているということに気

づいたことについて述べ、そのうえで礼儀の極意が接した相手を不愉快にさせない(されて欲しいことをする)ということであり、それが生徒指導と密接に関わっていることに気付いたと述べている。

Cは人は見た目に誠意が表れる、とのポリシーを得て、家族の次に最も身近な大人である教師として自身の姿勢を見て育っていく生徒に TPO に合わせた服装を心掛ける「大人の姿勢」を伝えていきたい、そして服装指導に際しては正しい着こなし方の指導を通して、生徒達に「誠意」を伝えることの重要性を伝えていきたいとの決意を表明している。

Dは生徒指導における予防的な指導を意識して指導してこなかったが、本講義において予防的な指導として「ルール・マナー・礼儀指導」があることを学んだことを吐露している。そのうえで自身の実践だけではなく、勤務先の生徒指導担当に伝え、終礼・職員会等で全職員共通理解のもと、子どもたちに指導していきたいとの思いを述べ、それらの指導が子どもにおいて自己実現を図っていくための自己教育力や実践的な態度を育むことにつながることを期待を表明している。

Eは礼儀の根本概念である「恕」を取り上げ、その具現化された例として手紙を取り上げる。手紙には相手を思う「恕」がいたる所に表現されており、謙虚さまでも表現できるものと指摘し、自分を主張したいのなら謙虚な自分にならないと相手に受け止めてもらえない、といった、生徒指導の場面で頻出するSNS上のトラブルに寄せて思いを述べている。そのうえで、この講義がこれまで思ったことがなかった、意識したことがなかった視点からのものであり、新しい知見が広がり、勉強になった、生徒指導を行う上での「教師として」「人として」の自分のあり方についても深く考えることができた、と述べる。

4. 考察

「礼儀を用いた予防的な生徒指導」を基盤とする教師教育における生徒指導の講義の効果について、たとえば受講生 A は、作法には意味のあること、その説明が必要なこと、そして同時に「礼儀を教える意味」の説明を加える必要性を述べている。礼儀と作法の本質と、それを児童生徒に伝えることの重要性を知り、心を込めて教えなけれ

ばならない、と強く意識するようになった。このように受講によって礼儀と生徒指導に対する意識と態度の変容が生じたと考えられる。それはまた B においても同様であり、礼儀の指導と日本の教育の目的である人格の完成、そして生徒指導との関連を指摘し、そのことに気付いたことを重く受け止めている。そのような礼儀と生徒指導、そして日本の教育の目的に関する構造を、具体的な作法に落とし込んで自身の気づきを述べているのが「服装」を取り上げた C と「手紙」を取り上げた D である。世の中の様々なものの扱いとかかわりの根底に「恕」の概念があり、それが「誠意」など様々な形で表出されるという、作法に共通する構造についての理解をそれぞれの言葉で述べてくれている。D はこのような作法やその構造だけでなく、予防的な指導として「ルール・マナー・礼儀指導」があることを本講義から学んだと述べる。そして勤務先において還元したいと決意を表明している。これは大学院での学びと現場との往還を目指す本大学院の設立目的に沿うものである。それと同時に、そういった指導が子どもの自己実現を図っていくための自己教育力や実践的な態度を育むことにつながることを期待しており、本講義の目指す礼儀と生徒指導の理想形を示してくれてもいるのであった。

このように、受講生は本講義を受講した結果、本講義のねらいを果たすだけではなく、大学院側が求める成果を、学生がその学びの中から自ら会得し、そのうえで意識と態度の変容があったことが、本講義の感想からは得ることができたといえる。

おわりに

本研究は教職大学院での教師教育における生徒指導に関する講義に際して、その中の「予防的な指導」に注目し、受講生に対して「礼儀」をその指導の手掛かりとして用いることにより、生徒指導に関する知識、理解、指導力等の深化を目指す教師教育の授業の開発を試みた。

その結果、受講生は本講義のねらいを果たすだけではなく、大学院側が求める成果を、学生がその学びの中から自ら会得し、それに伴う意識と態度の変容がみられた。

今後は生徒指導と「礼儀」の関係を説明するに際しての手掛かりとして、どのような「作法」を用いることが望ま

しいのか、検討を重ねていきたいと考えている。

営を充実させるために」,2011,p.4

国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター

「生徒指導って、何?」,国立教育政策研究所,2012p.2

引用・参考文献

福岡市教育センター「校内研究支援リーフレット 学級経

文部科学省『生徒指導提要』教育図書,2010,p.14